

幼児の遊びや友だち関係において立ち現れる 思いや考えの生成過程についての一考察

— 4歳児の相互主体的な姿の事例検討から —

網 島 大 輔[†]

キーワード：保育実践、目的共有、4歳児、足場かけ、立ち上がり

1. はじめに

幼児期の主体的な学びは、子どもが自ら環境に働きかけ、試行錯誤を繰り返し、深い学びを得るといった主体的な遊びによって生み出されるものである。これらを集団で共有していくことによって相互作用を生み、個人では得られない深い学びを得ることができる。これが、幼児期の主体的・対話的で深い学びであると言える。子どもの主体性を大切にする幼児教育では、この遊びや活動目的の共有プロセスのあり方がポイントであり、それを踏まえないと活動の成立を急かしてしまうなど、相応しくない形で共有される。その共有プロセスの根幹について考えると、直観的で、自覚はあるが言語化されていない部分がある未完成の願いや感情である自分の“思いや考え”がある。それらを相互主体的に伝え合う中で承認されたり、新たな知識や文脈が与えられたりして、満足感や達成感、充足感を得たりして遊びが進んでいく。そこから、また新たに遊びや活動が生まれるなどすることもある。体系的に幼児期での学びのプロセスを語るには、その点が重要であると考えられる。また、そのような友だち関係における自発的な遊びや活動を学びにどうつなげていくかは、子どもの姿からクラスの実態を把握し、力動的に一緒に遊び、活動をつくっていくとする保育者の姿勢が不可欠であるが、それらを支える保育者の

具体的な援助は、“共感”や“見守り”が中心になることが多く、その場の子ども同士のかかわりに委ねることも多いと感じる。そこで実践者として“友だち関係において思いや考えの立ち現れる過程”について事例検討を行い、目的共有のプロセスの根幹について明らかにしていきたい。

2. 研究の背景及び目的

“思いや考え”とは、本研究において、幼児教育で園生活全般に見受けられる子どもの未完成の願いや感情のことを示す。平成29年に改訂の幼稚園教育要領において「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「思考力の芽生え」では、「友達の様々な考えに触れる中で自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる」¹⁾と明記されており、友だちとのかかわりを元にして新しい考えを生み出すなど、幼児期の思考力の芽生えや学びの形態について触れられている。また、幼稚園教育要領で“主体的・対話的で深い学び”の実現に向けて留意されるように示され、領域「人間関係」においては、内容の取扱いの留意点として、「他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること」¹⁾とある。昨今の保育事情としては、日本の行事を含む活動を行う文化に合わせて日々の遊びを発展させたプ

[†] 学校教育専攻 教育科学コース 教育科学領域
担当教員：菅眞佐子

プロジェクト的發展形態の保育が行われるようになってきている²⁾など、複数人や集団などでの協同的な活動によって、より学びを深められることが指摘されている。しかし、集団での協同的な活動を行う場合には、保育者が活動の拡大を求めるあまり、性急に「分かりやすく目に見える形で、子どもたちが集団でなにかに取り組む」ことが目指され、幼児の主体性が後回しにされてしまいがちであるという実践の難しさが指摘されている³⁾。また、5歳児の協同的な活動の成立過程について、「目的共有がされていなくても協同的になる」ことや「協同的な活動が日ごろの遊びで決まった幼児の友だち関係を出発点としている」ことを示唆した先行研究⁴⁾や附属幼稚園等の保育研究において、友だち間で気づきを共有し、学びに至る過程としての事例は数多くあるが、幼児同士の相互に主体的なかかわりから、個々の中に思いや考えが立ち現れる過程についての考察はなく明らかになっていないと言える。そこで、本研究では、4歳児クラスの保育場面を対象に、思いや考えが立ち現れる過程を検討する。4歳児という発達年齢においては、自己主張・自己実現と自己抑制に関する調査の中で、幼児期の変化では、自己抑制は一貫して増えているが、自己主張・自己実現は、4歳半ば頃で水準のピークを迎えている⁵⁾ことや葛藤にかかわる多様なコミュニケーションがなされている可能性が示唆されている⁶⁾ことから、4歳児は、他者との関係の中で、“ゆずる”や“あきらめ”があまりないような相互に意志の主張を続けるような主体であることによって、幼児同士のぶつかりや葛藤を元に成長していくことがあげられる。また、3歳児では、友だちとのかかわりは遊びのイメージや目的の共有が難しい部分が多いが、4歳児では、これまでの経験を元に「〇〇したい」と徐々に目的を持つなど、志向性が出てきて、思いや考えを伝え合いながら友だちと遊ぶことを楽しむようになる。しかし、ここでいう目的は、遊びや友だちとのかかわりの中で、目的が移り変わるなど、強い動機や目的意識、文化的に期待されているような教育的な高い目標思考ではなく、すぐに周囲の影響と共に自生したり変容したりするような“ローカルな目的”と言えるだろう。これ

らのことは、同輩幼児間の言語的コミュニケーションについての先行研究において、4歳半以降、会話の相互作用能力が高まり、相手との共同活動の調整を行えるようになり、幼児間の会話は非相互作用的特徴から相互作用的特徴に変化する⁷⁾ことや「ことば」での会話ではなく、「思考を潜った」会話を為す時期であるが、相互間で共通のテーマを媒介に会話が成立するのは5歳後半である⁸⁾ことから推測できる。遊びや活動の中で目的から逸脱する範囲など、子どもの個々の捉え方について難しさがあるが、子どもの自主性や自律性から集団生活での態度の育成について適切な援助等も個々の姿から考察できるので、友だちとの相互主体的に思いや考えを伝え合う様子を丁寧につまみ、子どもの成長につなげていきたい。以上により、本研究では、4歳児の相互主体的な姿から事例検討を行い、幼児の遊びや友だち関係において個々の中に思いや考えが立ち現れる生成過程を明らかにする。

3. 研究方法

(1) 研究対象

対象は、筆者の現任園である幼保連携型認定こども園の4歳児、1クラスである。2021年度の4歳児クラスは、男児8名、女児8名の計16名である。2歳児クラスからの入園児もいるが、クラスの全員が進級児であり、3歳児クラスで共通の園での生活や遊びを経験している。

(2) 観察期間

2021年4月～7月、9月～11月までの合計134日間、自ら選んで遊ぶ場面(8～12時、13時から14時)を観察し、収集された保育実践事例の検討をする。いずれの事例も筆者が担任として保育に参加した場面での事例である。

(3) 観察・記録の方法

上記の期間の観察でみられた2人以上の幼児の問いかけや応答などの反応のやりとりの往復が最低1ターン以上みられたかかわりの中で、思いや考えの表出や受け入れ、取り入れ等が見られた場面に注目してフィールドノーツを作成

し、事例として整理した。事例の単位は、幼児がモノやコトとかかわり遊びはじめ、それを巡って他児との交渉がなされた場合、あるいは相互行為が切れ目なく続いた場合を一つのまとまりとして捉えて1事例とした。また、考察の際に後から、さらに詳細な場面や様子についてメモ等から補った。なお、事例中の子どもの名前は仮名である。

4. 結果と考察

(1) 思いや考えが立ち現れる構造について

収集された観察記録は、25事例であった。その中から相互主体的な姿が見られた12事例を検討した。分析の結果、思いや考えの立ち現れる全体的な構造として、観察中や考察段階の子どもの問いかけや応答方法のスタイルとして他児の“提案”から“受け入れ”のような応答行為が多く見られた。応答行為に関して5歳児の描画活動における他児との相互行為に関する先行研究では、他児がアイデアを付け加えたり、知識を提示したりするのを取り入れる「提案—取り込み」が最も多かった⁹⁾。本研究では、4歳児という年齢や先行研究のように描画など活動を区切っていないこともあり、「提案—取り込み」まで継続しない事例が多いが、“提案”や“受け入れ”に関して、自分の知っている何かが“提案”という行為により、活動に変化が見られながら進み、気持ちの高揚につながったり、“受け入れ”によるアイデアの承認に後押しされて活動を継続したりする姿が見られた。また、“提案”や“受け入れ”のスタイルとして明確な正解がないようなものが多く、だからこそ楽しく参加できたり、共有するようなテーマから、思いつきで参加したりすることができ、“一緒に遊ぶと楽しい”という情動の共有が起きる場面が見られた。

(2) 思いや考えの生成過程の特徴について

思いや考えの生成過程のパターンとして特徴的な部分が見られた。事例分析の結果、立ち現れる生成過程の特徴から、3カテゴリに分けて捉えることができた。大別すると《足場かけ》と《立ち上がり》の2つに分類でき《立ち上が

り》に関しては、さらに《共有された目的が発生することで立ち上がる活動》と《躍動することで立ち上がる活動》に分類した。それぞれについて事例と共に述べていく。(以下、《足場かけ》をタイプA、《共有された目的が発生することで立ち上がる活動》をタイプB、《躍動することで立ち上がる活動》をタイプCとして記述分けする。) また、“思いや考え”は個人の中で生起するものであり、遊び場面への参加者それぞれについて見ていく必要があるが、今回は検討した事例ごとの考察について報告する。

○タイプAの《足場かけ》について

心理学者ヴィゴツキー (Vygotsky,L.S.) の理論である「発達の最近接領域」、そこからブルナー (Bruner,J) らが提唱した「足場かけ (scaffolding)」(Wood, Bruner&Ross, 1976) の論考がある。発達の最近接領域は、ヴィゴツキー理論の中でもよく知られている考えである。ブルナーらの提唱により、「足場かけ」についても様々な研究動向が見られる。「足場かけ」について、大人による手助けや援助を前提としており、子ども自らが足場を見つけ出して創造していく過程が見落とされていることを指摘している¹⁰⁾。「足場かけ (scaffolding)」は、小学校以上での教授活動で論じられることが多く、本研究では、目的が文化による活動の性格から子どもたちの中で、はじめから明らかに決まっておき、そこに向かう子どもの姿やかかわりを「足場かけ」と分類する。また、佐伯¹⁰⁾が指摘しているような“提案—受け入れ”による周囲とのやりとりの中で足場を見つけていく過程も見られた。

A-1 <同じ目的に向かい、友だちの仕方を受け入れる>

事例1：『お水とった』(4月19日)

ホノカとキホは机の上で、お鍋に見立てたボウルに赤土と水を入れてごちそうづくりをしている。ホノカは、ボウルに赤土と水を入れスプーンで混ぜている。ボウルの中を見て「黄色いカボチャ」と様子を言葉にする。少し離れた場所で同じようにしてつくるキホ「お水とった」と話すが伝わっていない様子。ホノカ「トロトロ

にならないな…もっと入れよ」と山から赤土をスコップですくい入れて混ぜる。その姿を見て、キホ「こうやって水をとったらトロトロになったよ」とホノカのボウルを持って、水を少し流す【足場かけ】。続けてホノカがスプーンで混ぜながら「オレンジになってきた」と伝えるとキホ「お母さん、こんな色になったら、もうちょっとグルグルしてたん」と言う。

《考察》

ホノカは、キホの援助の後、取り入れはこの時には見られなかったが、赤土を足すだけでなく、水を減らしてトロトロにする方法があることを知ることができた。このように、子どもたちの中で、やり方がある程度、決まっているものを足場かけと捉える。トロトロにするキホの足場かけのかかわりは一方的であったようにも思われるが、その後の「オレンジになってきた」の言葉からキホの提案が受け入れに至ったことがわかる。

A-2 〈同じ目的に向かい、友だちの仕方を取り入れる〉

事例 2：『接着剤』（6月8日）

砂場での水路づくりで、流れを「せき止めた」と砂場に木の板を挿すなどして、水が流れて来ないように水路を塞いでいる。コウタは、木の板を砂に差し込み、手で周りの砂を集めて倒れないように固め「カチカチにしてやる」と言葉にしている。オウガが「手伝ったるか」とコウタに伝えると、「うん、おねがい」とこたえ、さらにシャベルで水路に置いてあるバケツに砂を入れ始め「これでめっちゃ、かたくしてやる」と言う。オウガは、「はい、接着剤とコウタの挿した板と板の間に砂をかける【足場かけ】。コウタは、オウガの言動に対して少し考えた様子の後、「くずれんもん」と声をかける、オウガも「やんなあ」と返す。「接着剤」と言いながらコウタも砂を板の間にもかけた。

《考察》

オウガの言葉に、コウタは、バケツに入れていた砂をオウガと同じように板の間にかけるなど、仕方をすぐに実践し取り入れた。オウガの「手伝ったるか」から「はい、接着剤」の一連の言葉から、オウガは教えてあげるといった強い

指示や意図はなく、手伝った様子である。共通の目的に向かい、「こんな仕方もあるよ」という具合の提案であり、コウタが仕方を取り入れた足場かけとなった。

A-3 〈同じ目的に向かい、友だちに仕方を教えてもらう〉

事例 3：『へびになるよ』（6月9日）

エイタとキョウジは、砂場に水をたくさん運ぶために透明のビニール袋に蛇口から水を入れて運んでいる。いろいろな大きさ、形の袋からエイタは傘袋を見つけ、蛇口から水を入れ、長く膨らんでいく袋の様子に「うおーすごい、へびになった」と喜び、「キョウジくん、見てと」キョウジに見せにいく。透明ビニール袋を使って砂場に水を流していたキョウジは、エイタの傘袋を見て「どうやってしたん？」と聞く。エイタは、間髪入れず「こうやって」と実物を見せてから、砂場に水を流し、「はい、キョウジくん」と自分が持っていた傘袋を渡し、一緒に蛇口の方に行く【足場かけ】。キョウジは傘袋を受け取り、エイタと走って水道の蛇口の方に行き、蛇口から傘袋に水を入れる。キョウジが水を入れはじめると膨らむ前から隣でエイタが「へびになるよ」と嬉しそうに伝える。キョウジは、徐々に膨らむ傘袋の様子を見て「にゆるにゆるへびみたい」と笑顔を見せる。

《考察》

キョウジは、「どうやってしたん」の問いかけに、「はい、キョウジくん」とエイタに使っていたものを渡してもらえ嬉しそうである。普段は、エイタとキョウジでもの取り合いや言い合いなどでトラブルになることが多いが、エイタの「へびになるよ」に対して、キョウジが「にゆるにゆるへびみたい」と応えるなど、同じようにできたことを喜ぶ姿が見られた。相互に受け入れながら足場かけが進んでいった。

A-4 〈友だちの考えを拒絶し、共通の目的に向かう〉

事例 4：『ごほん入れちゃう？…アカン』（11月12日）

積み木のタワーづくりで、ケイトが中心に積んでいたが、エイタも一緒に積みはじめる。エ

イタは、自分の目線より高くなったタワーを見て、「うわー高くなってきた」と喜び言葉にしてさらに積み木をのせる。エイタの言葉にケイトは「置いときたいくらいや」と言いながら、続けて積み木を一つのせる。積み木と梱包材を組み合わせてお寿司をつくっていたソウマが、そこにやってくると「ごはんも入れちゃう？」とごはんに見立てた梱包材を積み木タワーの方に入れる素振りをする。ケイトは、ソウマの行動に対して「アカン」と怒った表情で伝え、手を払いのけるようにする【足場かけ】。ソウマは、ケイトに手を払いのけられたが、積み木がのせられていくタワーを笑顔で見つめる。エイタは自分の背丈より高くなったタワーに、背比べをするように手を上にあげ、「うおー、百倍の高さかな」と言う。ケイトは積み木をのせながら「たかい、置いときたいくらいや」と言葉にする。《考察》

積み木のタワーに「ごはんも入れちゃう？」という提案に「アカン」というケイトの言葉や態度はソウマの新しい楽しい考えが拒絶され、“タワーを高くする”というより目的に向かう姿勢が周囲にも共有された。目的に“貢献するか”、“しないか”について判断されたような足場かけとなった。11月という時期から、共有される遊びがより目的への志向性が強くなってきたことが伺える。

《足場かけの事例考察より》

それぞれの事例の特徴的な部分としては、まず、「目的がはじめから明示的に決まっており、そこに向けて思いや考えが出てくる」ことがあげられる。目的達成に向けては何を知っているかが重要になり、自分が知っている知識の“提案”に対して、相手は“受け入れ”や“取り込み”をしていくことで、目的が達成された。その中で、教えられる方（学び手）は活動に向かう仕方など、スキルを教えてもらい、教える方（働き手）は、自己効力感が得られた。次に、「目的に貢献するか、しないかという判断になり、参加が継続しない場合もある」については、上記の事例は目的が達成されたものばかりであるが、達成できなかった事例もあり、“できる、できない”といったような提案の適切性が子ど

もから見て明確であり、不適切な提案をした場合には、相手を拒絶するなどしていた。事例4では、積み木のタワーを高くする目的により、他児の提案を拒絶するという姿も見られ、貢献するような提案かどうかを判断していた。さらに、「途中で目的が変わることがなく共有し続ける」では、目的を変えるような提案はなく、目的に向かうプロセスの一定の枠内で提案する姿が見られた。4歳児という発達年齢から、子ども同士の足場かけでは、まだ繰り返し経験してきたことが元になっていることもあり、どの事例も提案や受け入れ等の形は様々であるが、達成しやすい目的となっている。

(3) 《立ち上がり》について

前述の《足場かけ》は、目的が活動の性格からある程度、明示的で決まっており、目的に向かうプロセスに一定の枠があることを元にして思いや考えが立ち現れ、他者に伝えて活動を成立させている。それに対して、《立ち上がり》は、目的がすぐに移り変わっていくようなローカルで暗黙的な状態から、友だちとのかかわりの中で、目的が自発的に立ち上がり、志向性が出てきたり、その結果一つの目的に収束していったりする。また、目的と一緒に遊ぶ中で、移り変わっていったり、目的そのものが崩壊していったりすることもある。必ずしも目的に志向ではないが、思いや考えを出し合い、向かう方向が自分たちの中で立ち上がっていく中で、目指すものをつかんだり、状況が移り変わろうとしたりしている場面が多く見られる。目的が文化による活動の性格で決まっており、そこに向かう姿とした《足場かけ》との対比から、《立ち上がり》では、友だちと目的を徐々に共有し達成されるようなタイプBの《共有された目的が発生することで立ち上がる活動》と、目的が移り変わっていくタイプCの《躍動することで立ち上がる活動》に分類した。それぞれについて述べていく。

○タイプBの《共有された目的が発生することで立ち上がる活動》について

《足場かけ》のように、目的がある程度明示的に決まっているのではなく、友だちと“提

案”、“受け入れ”等をしていく中で目的が立ち上がっていき、結果的に「〇〇できた」「より楽しくなった」等と達成される。また目的がローカルであり、はっきりしていないことから、個人や友だち間で目的が途中から明示的になったり、目的が変わったりする。そのことが楽しく、さらに、目的志向になり、目的が達成するような行動や発言が同時に立ち上がり、目的達成に向かっていく。

B-1 〈ローカルな目的が友だちの介入により、明示的になり達成される〉

事例5：『にじいろとんぼちゃん、がんばれ！…逃がさんと死んでまう』（4月24日）

ソウマは、園庭にとまっていたイトトンボを手でつかまえ、いろいろな保育者に嬉しそうに見せまわる。虹色の目をしていたことから「にじいろとんぼちゃん」と名前をつけたようだ。たくさんさわっているうちに羽がやぶれてしまったことから、逃がそうと、トンボが飛べるようにフワッと空中に投げ上げるが地面に落ちてしまう。もう一度つかみ、ソウマ「にじいろとんぼちゃん、がんばれ！がんばれ！」と言い、また飛べるようにフワッと投げ上げる飛ばない。「投げて、飛ばして…」と言葉にしながら繰り返しているところにキョウジがやって来て、少し草が生えている地面に落ちたトンボをつかまえ、羽を触って様子を見ている。ソウマはキョウジに「草のところ苦手、絶対飛ぶで、投げたら飛ぶと思うで」と言うがキョウジは聞こえていない様子で手のひらにトンボのをせ、違う方へ歩いていく。ソウマは両手を腰にあててキョウジの後について、「逃がそ！逃がさんと死んでまう」と言う。キョウジは、その声に足を止めトンボを見つめている。ソウマはキョウジの正面にまわり「逃がす」と言うが、「逃がさない」とキョウジは返し、言い合いになり、キョウジは叩く素振りを見せ、違う方へ行こうとする。それでもソウマは、またキョウジの正面にまわり「逃がす」と言い返す。キョウジは根負けしたのか、「そーや！あそこに蜜があるんちゃう」と柵の向こうの草むらの方に投げる【立ち上がり】。すると、トンボが飛び、柵の向こうの草むらにとまった。柵に手をかけ、その様子を見て

「お母さんがいるんよ」と言う。ソウマも同じように柵に手をかけ様子を見ながら、キョウジの言葉に「車があるのかなあ？」と返す。キョウジ「ないけど、飛んで迎えに来るとちがう」とこたえる。「これで、めでたしめでたし」とソウマは笑顔になる。

《考察》

ソウマは、キョウジが虫好きで、トンボをなかなか返してもらえないことや羽が破れていることに気がついていることから、トンボを自分に返さなくてもいいから、それまでは、トンボと遊ぶようなかわりもあつたが、“逃がす”ことを優先的に、より明確に決心して発言した。キョウジは、ソウマの「死んでしまう」「逃がす」の言葉を聞き、葛藤しながらも受け入れた。“逃がす”ことが二人の共通の目的となり、キョウジは、「あそこに蜜があるんちゃう」と気持ちを切り替え、柵の向こうへ投げた。キョウジが投げた後に飛んだトンボの様子を二人で柵から見つめ、キョウジの「お母さんがいるんよ」という言葉に足して、ソウマがさっきまでは変わって穏やかに「車があるのかなあ」と聞くなど、目的が達成され落ち着いたようであった。他児が介入することで、“トンボを逃がす”というぼんやりしていた目的が明示的になり、情動体験を経ながら、共有化され、達成された。

B-2 〈友だちとのかかわりから暗黙的に目的が自生し、達成される〉

事例6：『スーパーパー』（5月7日）

コウタとケイトは、穴あきのキャップがついた500mlのペットボトルから砂場の小さな山に水をビューとかけ流す。ソウマはシャベルで近くを掘っていたが、「負けない、ふさいでやる」と山の上から流れる水に砂をかける。ケイトは流した水がソウマに砂で埋められ「うわー、ふさがれてる」と言う。続けてコウタが砂で埋められたことから、「こうなったら」と水を流している途中で、キャップをはずす【立ち上がり】。すると勢いよくペットボトルから水が流れ、ペットボトルから出てくる水の量や勢いが増したことからソウマが「うわースーパーパーだあ」とその場に倒れ、その言動にコウタとケイトは笑顔になり、新たに水を汲んできてキャップはつ

けずに、「よーし、もう一度、スーパーパワー」とペットボトルの口を下に向け、勢いよく、水をかけ流す。

《考察》

コウタは、ソウマの「ふさいでやる」と水を埋める言動や普段、一緒にいることが多いケイトが「ふさがれてる」と言葉にするなど、やりとりの中から、“ふさがれないように流す”と考えるなど、目的が共通となり、キャップをはずした。キャップをつけるよりたくさん流れ出ることを知っており、キャップをはずすとその前より勢いよく水が出たと同時に、ソウマの「スーパーパワーだ」という言葉と反応に、おもしろさを感じ、「もう一度…」と取り入れた。ケイトも取り入れ、水が流れる量が増え、目的が達成された。穴あきキャップのペットボトルから水を流す遊びから、友だちのかかわりの中で、友だちの言動におもしろさを感じながら、段々と目的が共通になり、暗黙的な提案と取り入れをしながら繰り返して遊びが継続している。

B-3 〈友だちの行為の取り入れから提案が明示的になり、目的が達成される〉

事例 7:『ケロって言ってとぼうか』(6月30日)

砂場に水をたくさん流して遊んだ後、大きな水たまりができています。そこにオウガとケイト児が順番にひっくり返したビールケースの上からジャンプしている。そこにホノカがやってきて「3、2、1」とカウントダウンしてからジャンプする。次のケイトも「3、2、1」とジャンプし、オウガも「3、2、1」でジャンプする。ホノカの番に戻り、「じゃあ、今度は、みんなでケロっていってとぼうか…ケロ」とジャンプし【立ち上がり】、ケイト「ケロ」とジャンプする。オウガ「ケロ」とジャンプする。その後も3人でジャンプし続ける。

《考察》

ホノカの「3、2、1」でのジャンプを他の2人が取り入れ、提案と受け入れが成功したことから、「ケロって言ってとぼうか」とホノカが具体的に提案する。ケイトとオウガの二人もその提案を受け入れ、3人で同じ動きをするおもしろさを感じていた。自分の順番がきたら友だちの言動を取り入れ、真似をするなど、取り入れか

ら「みんなで〇〇しよっか」と提案が明示的になり、“提案—受け入れ”の形ができた。目的共有がされ、達成できた。

B-4 〈友だちの行為の取り入れから、暗黙的に楽しさの共有という目的が自生し、達成される〉

事例 8:『お水チョコレート』(7月9日)

石鹸をおろし器で削り、水を入れてホイップ状になる遊びがクラスで広まり、ホイップクリームのにじり袋で、砂を型抜きしたケーキの土台に飾ろうとする。ホノカは、保育者とにじり袋に入れた泥のセッケン水を砂の型抜きケーキの土台にホイップしてみる。少し泡が出たが、先の方に泥がつまっております、袋の上から溢れ出てきてしまう。「きゃー」と驚いたように声をあげ、笑顔になる。キホは、ホノカの様子を隣で見守り、同じように「きゃー」と声をあげ笑顔になる。ホノカは、にじり袋を机に置き、泥で汚れた手を洗いに行き戻ってくる。キホは、手洗いから戻って来たホノカににじり袋を持ち上げ、「はいはい、お水チョコレート」「はい、入れて、入れて」と机の下のところで袋の上の部分を広げる【立ち上がり】。ホノカは、そこにキホのつくっていたボウルから泥セッケン水をキホの持っているにじり袋に注ぐとにじり袋の先から中身が少し出てきているのがキホの足にかかり「きゃー」と足を下げ前かがみになる。ホノカもキホの様子から中身が先から出て、落ちてきていることに気がつき同じように「きゃー」と笑顔になる。キホはにじり袋に入ると、先からこぼれ出ているので、急いで袋の上を塞ぐように掴んで持ち、机の上の砂の型抜きケーキのところへ持って行く。ホノカは、にじり袋の膨らんでいる部分をつかみにじり出そうとする。しかし、やはり先が詰まっております、上から出てきてしまい2人で「きゃー」と笑顔になる。

《考察》

キホは、ホノカの姿から、本物のホイップクリームみたいに絞れないことをわかっていましたが、上から溢れ出ることも含め、“ドロッと出てくるのを楽しみたい”気持ちがあり、「はいはい、お水チョコレート」などと急かすような口調で言葉にしている。にじり袋の中身が落ちて

きたことから、「キヤー」という声から、ホノカも2人でする楽しさの目的共有へと向かっていく。

ホノカは、一度経験したが、「上から出てきてしまうから気をつけて」など、話すわけでもなく。キホもホノカがしていた様子を見ていたこともあり、上から出るのを防ごうとしっかりと上部の口を掴んでいた。結果的には、先から出る量より、上から出る方が多くなり、ベチャベチャに砂の型抜きケーキの土台も崩れたが、その結果よりも行為がおもしろく、もう一度する姿が見られた。友だちのしていたことを取り入れ、その行為の“楽しさの共有”という目的が暗黙的に自生し、そこに向かい達成された。

《共有された目的が発生することで立ち上がる活動の事例考察より》

それぞれの事例の特徴的な部分としては、まず、「友だちと提案や取り入れをし合い、立ち上がったローカルな目的を共有することでさらに思いや考えが出てくる」ことがある。目的がある程度明示的に決まっているわけではなく、事例8のように、“一緒に楽しみたい”など、情動が共有されることで、参加の継続がしやすい。次に「目的が具体的な提案により、明示的になり共有される」ことがあげられる。事例5、7のように具体的に“こうしよう”、“こうしたい”と言葉にして提案していくことで、目的共有が明確になる。しかし、《足場かけ》に比べて、文化的な背景や活動の性格明から、子どもにとって明らかになっている目的がはじめからあるのではなく、目的が達成されるような行動や発言が同時に立ち上がり、その結果が一つの目的に収束していくなど、はじめから目的が定まっていはいないローカルな目的であるといえる。また、反対に「具体的な提案がなくても暗黙的に目的が立ち上がる」ことについては、事例6、8のように、目的に関する具体的な言動がなくても、友だちの行為の受け入れや取り入れをしながら目的が自生し、遊びや活動が継続していた。向かう目的や目的が達成されるような行動や発言が同時に立ち上がり、目的に向かっていくおもしろさを感じられる。

○タイプCの《躍動することで立ち上がる活動》について

《共有された目的が発生することで立ち上がる活動》のように、友だちとの“提案”、“受け入れ”の中で目的が自生するが、目的そのものが移り変わっていったり、目的そのものが崩壊していったりする。遊びや活動の中で目的がどんどん変わっていくことが、その場限りの楽しさを越えたものになり、さらに思いや考えをつくっていくことにもつながる。

【C-1】〈友だちと思いを主張し合う中で、目的が移っていく〉

事例9：『海にしよか?』（4月19日）

保育者が砂場道具を洗うためにタライにシャワーの水を出し置いている。キョウジを見つけ、シャワーを持ち、タライの外にも流し周りに水たまりができる。後から来たエイタ「エイタにもかして」キョウジ「いやや」とシャワーの取り合いをはじめ。エイタが奪い取り、タライに続いて水を入れようとする。それでもキョウジ「僕もしたい」と取ろうとすると、エイタ「うるせー」と水が入ったタライをひっくり返す。タライの水がこぼれ、水たまりがさらに大きくなった。その様子を見てキョウジ「あっ大きくなった!海にしよか?」と笑顔になり【立ち上がり】、エイタ「うん」と笑顔で答え、二人で水たまりに入る。

《考察》

「シャワーを使いたい」とそれぞれの目的に合わせて提案や拒絶をしてきたが、思いを主張する中で、タライの水がひっくり返り“水たまりが大きくなる”という現象から、「海にしよか」という文脈が与えられ、水たまりに入るという次の遊びへと移っていった。

【C-2】〈友だちとの開放的なやりとりの中で、目的が拡散しながら移っていく〉

事例10：『うわぁこんなんやで中身』（4月22日）

大きな金タライの中に砂や赤土を入れ、次第にお鍋に見立てて、数人が集まり、混ぜたり、さらに水や砂、赤土を入れたりしている。キョウジ「カエルのうんち入れるで」とボウルでつくっていたドロドロの泥をお玉でタライに入れ

る。続けてコウタ「カエルのおしっこ」と赤土をスコップですくってきて入れる。ケイトが「まぜまぜ」とスコップでタライの中を混ぜると泥が沈み、水かさが増したことで表面が波のように揺れる【立ち上がり】。タライの様子を見て「おぼれてる～めっちゃ、おぼれてるんですけど～」とコウタも混ぜる。ケイトも一緒に混ぜながら「うわあ、こんなやで中身」と笑顔で声をあげ、赤土をすくいタライに入れ、さらに腕まくりをして混ぜる。キョウジもスコップで土をすくってきて入れて混ぜ「やばい、あふれそう」という。さらにキョウジが強く混ぜると泥がケイトの服に跳ね、ケイト「わあまた着替えなアカン」と言う。

《考察》

ケイトが「まぜまぜ」と混ぜるうちに、混ぜた泥がタライからあふれそうになり、コウタが、表面が揺れる様子を「おぼれる」と表している。ケイトは、混ぜた時に他児が泥や土を入れると、水かさが増えることにおもしろさを感じ、「もっと増やしたい」と赤土を入れる。キョウジやコウタは、ケイトの混ぜる行為を取り入れた。はじめは“泥や土を入れる”目的が、行為の取り入れにより、“混ぜる”、“あふれさせよう”と拡散的に移っていった。

C-3 友だちとのかわりから目的が自生するが、判断がなく移っていく

事例 11：『スカイタワーは?』（5月12日）

コウタとソウマの2人が保育室の生き物コーナーの虫かごからダンゴムシを机に出している。そのうちに、コウタが虫かごについていた4本の割り箸でダンゴムシが逃げられないように四角い囲いをつくってダンゴムシの様子を見ている。囲いの隙間から逃げ出しているダンゴムシがあり、ソウマが「でちゃう、でちゃう」と伝える。コウタが割りばしで隙間がないように囲い直す。続けてソウマが「出ていかない方法ある?」と聞く。コウタは「スカイタワーは?」とこたえる【立ち上がり】。それに対してソウマは「ああ～スカイタワーね」と言う。コウタが4本の割りばしを全部虫かごに立てかけ、ダンゴムシは自由に動き回るが、2人はそのまま違う遊びへと移っていく。

《考察》

ダンゴムシが囲いから出てしまい、それを直したり、“出ていかないようにどうするか”と新たな仕方を考えようとしたりしていた。ソウマの「出ていかない方法ある?」は、2人の共通の目的に向かうような言葉がけであった。それに対して、コウタの「スカイタワーは?」の提案があり、ソウマも共感的な言葉で受け入れをしている。その後、コウタが4本の割りばしを虫かごに立てかけ、ダンゴムシが自由に歩き回っていても2人とも気にせずに触り続けていた。一度、“ダンゴムシを逃げないようにしよう”と共通の目的が出てきて提案や受け入れをするが判断がなく、次のことに移っていった。

C-4 友だちの行為に目的が集約されるが、また拡散しながら移っていく

事例 12：『こうするのは?』（6月10日）

コウタとケイトとキョウジの3人が一緒に水道から砂場の方に向かって樋やトンネルをつなげ、水道の水を流すが途中で傾斜が上がっていることもあり、砂場まで流れずにいる。ケイトは水の流れが滞っている箇所に来て、「ここが上り坂になってるからや」とつぶやく。キョウジは、上り坂で水が逆流して樋の重なりから流れ出ているのを見て、「そうかここが穴になってるから、出てってまうんや」と言う。コウタは、水が流れてきていない箇所を見て、2Lのペットボトルに水を入れて持ってくる、反対側から水を流す【立ち上がり】。コウタの流すペットボトルの水が樋から漏れ出てキョウジの足にかかり「あ!ぬれてもた」と声にする。ケイトは樋から水が漏れる様子から「こうするんは?」と樋の重なりを反対にする。コウタは、「よーし、もう一度」とペットボトルに水を汲み流し、反対側に流れると「流れた」と喜ぶ。ケイトは、反対側から水が流れたことから、違う箇所についても樋の重なりを反対にしてみる。キョウジは「お魚ちゃん流れるかな」と砂場で使っていた魚の容器を持ってくる。

《考察》

水道の蛇口から砂場まで流れないことから、“上り坂になっている”、“穴になっている”、“水が流れていない”というそれぞれの思いや

考えが出てきた。コウタがペットボトルの水を流した際には、一度、集約的に“樋に水を流す”ことへと目的が変わったように感じられた。ケイトは樋の重なりを反対にするなど、具体的に提案したが、キョウジは、魚の容器を流すことへと興味に移り、コウタは水が流せたことで喜び、終息していった。“樋に水を流す”ことは一貫した目的であったが、砂場まで流すということからは移ろいでいき、ローカルな目的になり、個々の遊びへとまた拡散していった。

《躍動することで立ち上がる活動の事例考察より》

それぞれの事例の特徴的な部分としては、まず、「友だちとのやりとりの中で、暗黙的に目的が自生するが収束せず拡散したり、移り変わったりしていくことで、さらに思いや考えを出していく」ことがあげられる。とにかく、一つのことに定まらず、それが、提案や受け入れなどを継続していくことにもつながっていく。共有された目的が、それぞれ個人に返り、新たな思いや考えが表出された。次に「目的に対する提案の適切性が明確でなく、目的共有もされないことから参加の継続がされ、友だち関係での自己発揮がされやすい」においては、事例10のように、開放的にどんどん共有されたモノやコトにかかわり“提案”や“取り入れ”をしたり、事例11のように、目的が自生してもそれができるかどうかなど、提案の適切性が子どもから見ても明確でないため、新たな考えを受け入れられたりしてそのことにより、参加の継続や友だち関係における自己発揮につながりやすい。

5. 総合的考察

本研究では、4歳児クラスの保育場面を対象に、友だち関係において思いや考えが立ち現れる過程について分析、検討した。その結果、思いや考えが立ち現れる場面を《足場かけ》や《立ち上がり》といったある一定の枠組みに分類したことで、友だちの存在を媒体として、《足場かけ》のように文化的な背景による活動目的に向けて援助をするように思いや考えが生まれたり、《立ち上がり》のように友だちと思いや考えを生成しながら目的が自生していき、共有さ

れた目的が発生することで遊びや活動が進んでいったり、さらに躍動的に目的が立ち上がり、移り変わっていく楽しさを感じたりするなど、思いや考えの生成が見られる場面について明らかになった。それらの特徴について、表1にまとめた。

これらが見出された意義について、以下3点に渡って考察し、最後に課題を述べる。

第1に、「足場かけ」や「立ち上がり」のいずれにおいても子どもが複数で遊びや活動をつくりあげていくなど、他者を媒介として、思いや考えを生成する場面が多くあった。2で述べた山本⁸⁾が示唆するように4歳児の発達特性として、事例中の“提案”や“受け入れ”等での言動は、思考を潜った会話が多い。また共通のテーマを媒介に会話が成立するのは5歳児後半であることから、「目的の明示化や高次化を急がない」ことを提起する。大人は目的志向であり、保育者も足場かけのように援助をしてしまうことがある。それに対して、子どもは、そればかりにとらわれない自由さがあるが、個々の経験を元にした隠された生産思考のようなものがあり、事例のように足場かけが成立した。4歳児の「足場かけ」は、“提案—受け入れ”だけではなく、“行為—取り入れ”など、事例1、2のように互いの承認がないまま進んでいく場面も見られた。「足場かけ」であっても目的の共有がなされないまま他者から知識や文脈が与えられるが、それでも遊びや活動が継続していくことが示唆される。このことは、「足場かけ」であっても必ずしも“目的が明示的である必要はない”ことを示している。さらに「立ち上がり」においては、子どもたちの中で、はじめから目的が定まっていないローカルな目的が自生的に発生して、移り変わっていくことから“目的が高次化せず、ローカル的である”ことを示していると言える。また、目的の明示化について、文化的な背景による遊びや活動、素材や材料によって、明示的になりやすいことが考えられる。その点においても配慮や検討が必要である。思いや考えが立ち現れるそれぞれのタイプについて、目的との関係性を図1で示す。

第2に、思いや考えを他者と共有する際に重要な参加の継続性について、「いろいろな参加に

表 1：思いや考えが立ち現れる場面の特徴

足場かけ	<ul style="list-style-type: none"> ・目的が活動の性格から、ある程度、明示的に決まっており、目的に向かうプロセスに一定の枠がある。 ・目的達成に向けては、何を知っているかが重要で、“提案”、“取り入れ”等をしていくことで目的が達成される。 ・提案の適切性が子どもから見て明確であり、不適切な提案をした場合には、相手を拒絶するなど、参加が継続しない場合もある。
立ち上がる 活動 (目的共有が達成される)	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちとの応答で目的が自生し、目的が暗黙的な場合と具体的な提案で明示的になる場合がある。 ・ローカルな目的であることから志向性が出てくるなど、目的が達成されるような行動や発言が同時に立ち上がり、その結果一つの目的に収束していく。 ・「足場かけ」に見られるような目的が明示的に決まっていなくて、情動が共有されることで、参加の継続がされやすい。
躍動すること で立ち上がる 活動	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちとの応答で目的が暗黙的に自生するが、目的そのものが拡散したり、移り変わったりしていく。 ・共有された目的が、個人レベルに戻り、新たに思いや考えが創造される。 ・「足場かけ」のように目的が明示的に決まっておらず、「共有された目的が発生することで立ち上がる活動」のような目的共有もされないが、参加の継続や友だち関係において自己発揮につながる。

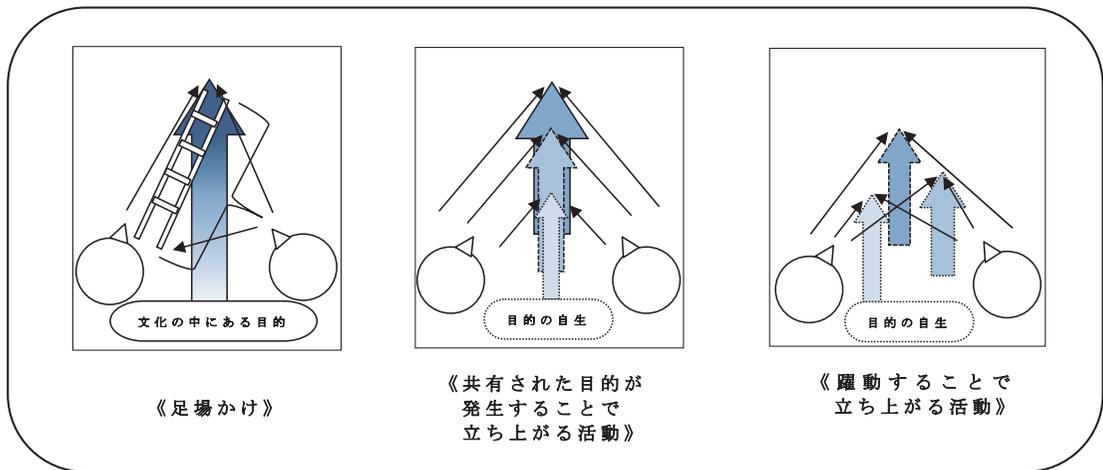


図 1：「足場かけ」「立ち上がり」の目的との関係

について承認される幅が必要である」ことを提起する。事例4の「足場かけ」において、拒絶の言動があるなど、目的が活動の性格から、ある程度、明示的にある「足場かけ」によって参加の継続ができなかった。そのような活動ばかりでは、ある一定の子どもの参加しか許容しないことを孕んでしまう。事例4では、11月という時期であり、友だち関係も深まった仲であったため、その後に大きな影響はなかったが、4月初からそのようなことが多く起きるような状況で

は自己発揮ができないことが懸念される。その点、ローカルな目的が暗黙的に自生したり、移り変わったりする「立ち上がり」は、参加の許容範囲が広いと言える。保育者が主導的に進めることが多いクラスのみならず経験する活動においても目的をローカルにしたり、移り変わったりすることを恐れずに活動を展開していくことが、参加できる幅を広げる際に有用である。

第3に、4歳児では、今までの経験を元に「〇〇したい」と高次ではない、ローカルな目的を

持って遊ぶことを楽しむようになるが、「躍動することで立ち上がる活動」に見られるような目的が自生するが拡散したり、移り変わったりする様子は他児の言動の明確な適切性がなく、目的達成などの結果が伴わないことが多い。“躍動”と分類したように、目的がシフトしていくような遊びのダイナミズムがあり、「結果が伴うような“〇〇するための遊び”と限定的に見るのではなく、過程に注目する」ことを提起する。“できる”、“できない”のような活動に対する提案の適切性の明確さではなく、子どもの思いや考えの生成について、発想や創造性から自己発揮がなされているかが重要であることを思いや考えをどんどん立ち上がらせて遊ぶ子どもの姿が示していると言えよう。本研究の課題としては以下があげられる。まず、先行研究との関連付けについて体系的に整理していくことが望まれる。思いや考えが立ち現れる過程であるが、「協同性」「目的共有」「参加観」など、広く波及していくような内容であり、理路整然としない部分が多い。これらを検討していくことで、保育実践の在り方や子どもの成長について体系的に捉え直す上でも有用である。次に、「足場かけ」や「立ち上がり」など観察された場面の事例の代表的なものについて考察してきたが、時期を追うごとに変わっていくような横断的な部分について検討できていない。仮説ではあるが、4歳児の終わり頃から目的への志向性や共有感が高まり、5歳児では、行きつ戻りつしながら目的共有から協同へと移り、学校教育での問題解決学習のような他者と協働しながら自ら問題を発見し、解決していくことへとつながると考える。そのためには、目的から達成への容態が自生的であるような遊びや活動を4歳児期にたくさん経験し、それに向かう構えをつくることが重要であると考察する。これらのことを今後の課題として引き続き実践と共に研究を続けていきたい。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2018) 「幼稚園教育要領解説」 フレーベル館
- 2) 秋田喜代美 (2020) 「日本の新たな保育の物語へ

の展望」発達, 第 159 号 pp.53-58

- 3) 川田学・津田千明 (2009) 「幼児における協同性とその援助の視点を探る」香川大学教育実践総合研究 18, 65-78
- 4) 保木井啓史 (2015) 「幼児の協同的な活動はどのようにして成立しているか —メンターシップの概念による分析—」保育学研究 53 (3), 261-272
- 5) 柏木恵子 (1988) 「幼児期における自己の発達」東京大学出版
- 6) 岩田美保 (2020) 「園における集団のなかで育む感情—四歳児クラスの仲間間の葛藤解決を踏まえて」発達, 第 163 号 pp.57-62
- 7) 山本弥子 (2001) 「幼児間の会話発達に関する研究 (2) —3, 4 歳台における会話特徴分析—」第 68 回日本応用心理学会 大会論文集 p.40
- 8) 山本弥栄子 (2003) 「同輩幼児間の言語的コミュニケーション (会話) に関する研究—2 歳から 6 歳までの各年齢群の比較分析から—」佛教大学教育学部学会紀要 (2), 201-220
- 9) 堀田由加里 (2019) 「5 歳児の描画活動における他児との相互行為に関する微視的分析—隣接ペアに着目して—」保育学研究 57 (2), 30-42
- 10) 佐伯胖 (2007) 「共感—育ちあう保育のなかで—」ミネルヴァ書房

参考文献

- ・L.E バーク A. ウィンスラー 著 田島 信元 田島 啓子 玉置 哲淳 編訳 (2001) 「ヴィゴツキーの新・幼児教育法—幼児の足場づくり—」北大路書房
- ・ヴィゴツキー L.S. 著 柴田 義松 訳 (2001) 「思考と言語」新読書社
- ・厚生労働省 (2018) 「保育所保育指針」フレーベル館
- ・内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018) 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」フレーベル館